



本格的な夏を前に、最近は夏に多い子供の病気が増えてきています。今回はその「夏に多い子供の病気」をテーマにお話しします。

★ヘルパンギーナ★

原因ウイルス：エンテロウイルス

感染経路：飛沫感染、間接的経口感染

潜伏期間：2～4日

好発年齢：0～4才くらいの子ども

症状：高い熱が出ます。のどの入り口に左右対称に小さな水疱や潰瘍ができる病気です。

治療：「特効薬」はなく、症状をおさえる治療が中心です。



★溶連菌感染症★

早期に診断治療する必要がある重要な病気です。

原因菌：A群β溶血性連鎖球菌

感染経路：飛沫により感染

潜伏期間：2～5日

好発年齢：ピークは、4～6歳で比較的大きいお子さんに見られ、大人も感染することがあります。

症状：発熱、咽頭痛及び発疹（紅斑）です。突然の38℃以上の発熱と咽頭痛から始まり、1～2日遅れて発疹が出現したり、莓のような舌になることがあります。回復期の7日を過ぎる頃に手足の先端部分の皮がむけることがあります。

合併症：最も重要なことは、発熱後2～3週間で、腎炎（急性糸球体腎炎）やリウマチ熱を引き起こすことがあることです。

これらの病気は、一生の問題となるため注意が必要です。



治療：抗生物質で適切に治療を行えば、すぐによくなりますが、腎炎やリウマチ熱の予防のためには、10日間の服用が必要です。

★アデノウイルス感染症★

原因ウイルス：アデノウイルス。何種類かの型があります。

感染経路：飛沫感染

潜伏期間：5～7日

症状：39～40度の高熱が4～5日続き、のどの痛みが強く（咽頭炎の症状）、さらに、頭痛、吐き気、腹痛、下痢などを伴うこともあります。高熱のわりに、比較的元気な子が多く、目が赤く、目やにがでるとい結膜炎の症状をとまうと、これがプール熱（咽頭結膜熱）です。

治療：「特効薬」はなく、症状をおさえる治療が中心です。熱やのどの痛みをおさえる薬（解熱鎮痛剤）、目やにがひどいときは目薬を使って、体力をおとさないように回復するのを待ちます。主要症状消退後2日を経過するまで出席停止となります。

また、このほかにも、熱だけの夏かぜや発疹（ブツブツ）のできる夏かぜもあります。いずれの夏かぜも、中枢神経（脳や脊髄）の中に入り込みやすい性質があり、髄膜炎をひきおこすことがありますので、注意が必要です。この夏かぜに合併する髄膜炎は無菌性髄膜炎で発熱、強い頭痛、嘔吐がみられ、ふつうは治療を受け、安静にしていれば1～2週間でなおります。今年は、無菌性髄膜炎を合併しやすい夏かぜが流行しているようで、注意が必要です。

幸い、どの病気も適切な治療を受ければ良くなる病気ですから、ここで話したような症状がみられたら、速やかに受診をしましょう。もちろん、これらの病気を予防するために、家族みんなでうがいと手洗いを励行し、規則正しい生活を心掛けましょう。